

Title	15 答えのない世界への入口
Author(s)	三笠, 友洋, Mikasa, Tomohiro
Citation	学問への誘い - 大学で何を学ぶか - , 2014: 65-69
Date	2013-12-25
Type	Learning Material
Rights	publisher

答えのない世界への入口

三 笠 友 洋

私は学生時代に編入学を経験しており、二つの大学、二つの学科で学生生活を送りました。高校を卒業し最初に入学した大学で専攻したのが電子情報エネルギー工学という分野で、そこで二年間学んだ後、三年生の途中で思い直して別の大学の建築学分野の編入学試験を受験したのです。高校生の時、進路選択をいい加減に考えていたというつもりはなく、それなりに悩んで選んだ分野でしたし、実際最初に入った大学で受ける電子工学系の講義の中で、物理的な諸原理を理解し、それがどのように技術的に応用され社会の中で活用されているかを知ることが、知的な刺激に満ちた体験だったと記憶しています。一方で、故郷を離れ様々な人と出会い様々な経験をする中で、より人間の生活や喜怒哀楽に近いとこ

ろで物作りを考えていきたいという思いが徐々に強くなり、改めて進路を考え直す中で当時の私がひかれたのが建築デザインの分野だったのです。

編入学の制度は、基本的に高等専門学校などで同じ分野の科目をある程度履修していることが前提になっていて（私の体験に基づく理解ですが）、他分野からの編入学生は前の学科で取得した単位をかなり甘めに認定してもらった上で、時間割上履修することができずすべての科目を取りきってなんとか正規の年限で卒業できるというような状況になります。一般教養系の科目といくつかの基礎的な専門科目を除いた多くの科目を二年間（実質的には卒業研究までの一年半）で履修するわけです。当時は一年生と二年生と三年生の科目を同時に履修しているような状況なわけです。今から考えてもなかなか大変な状況だったように思いますが、経済的に留年するわけにもいきませんし、なにより自分で学びたい分野を選び直したのだという意気込みもあり、その忙しさそのものの中にむしろ充実感を感じていたのを覚えています。

編入後の講義で内容的に一番苦勞したのは、建築学科特有の設計演習系の科目だったように思います。設計演習の科目はクラス全体が先生ごとのグループに別れ、その中で先生と学生が対一で設計案の内容について議論し指導を受けながら、個人個人が自身の設計案をまとめ、図面化し提出するという形式が一般的です。私が学んだ大学もそのような形式を取っていました。設計がやりたくてわざわざ編入してきたわけですし、一番楽しみにしていた科目でもあり、そのプロセス自体は非常にエキサイティングなものでした。先生方の口から飛び出してくる言葉は建築の機能的なことや構造的なことにとどまらず、人間について、歴史について、社会について、美学について、その他様々な視点から論点やアイデアが投げかけられます。その一つひとつを新鮮に感じ、驚きを伴って受け止めるわけですが、問題はその一つひとつを設計のアイデアに展開できるまでに理解は及ばず、その言葉の広がりの中からどのように一つの設計案をまとめあげるべきなのか戸惑ったのです。設計は無数の価値の中からある一つの筋道を見いだして、一つの計画案に統合していくわけですから、どれだけやっても他の選択肢がありうる状態がつづいていきます。答えがないのです。高校までの授業で学ぶ内容には基本的には一つの答えがあります。当時の困惑は、それまでの一つの答えを求める学習の仕方から抜け切れていなかったことに原因があったのかもしれませんが、先生方から投げかけられる魅力的な言葉や考え方にひかれつつ、

けれどもうまく活かすことのできない戸惑いの中で試行錯誤をし、最終的にはわからないという感覚と向き合う中で自分なりの理解と方法を見いだしていくしかないのだと思うようになりまし。試行錯誤の後にそういう考えに至った時、少し楽になり、またより楽しんで取り組めるようになったのを記憶しています。

私自身の体験をもとに建築の分野の例について話を進めましたが、建築にかぎらず、あるいは学問にかぎらずあらゆる分野の先端には答えのない世界が広がっていて、大学の講義はその入り口にあたるものなのだと思います。講義の中で習得する知識は、その答えのない世界を進んで行くための道具となるべきものです。講義や演習などの中で出会う戸惑いや疑問は、新しい発見をもたらしてくれる手がかりになるべきものです。講義の先にある答えのない世界をおぼろげながらもイメージすることができれば、講義の受け方も変わり、その意義も二倍三倍と膨らんで行くのではないかと思います。私の場合は、その先にある世界をよりイメージしやすい分野が、当初専攻した分野とは別の分野だったということなのかもしれません。

最後に、学生時代に私自身が先生から言われた印象的な言葉の一つを記しておきます。

私があることがらについて質問をすると、「私にはわからない。それはあなたが調べて私に教えてください」と言われたのです。質問をしにいつてまさか逆に教えてくださいと言われるとは思いませんから、はっとしたのをよく覚えています。今思えば、当時先生がその質問に答えるのは容易たやすかつたにちがいありません。それでも先生がこのように私に言ったのは、それが大学で学ぶ上での本質的なことがらだったからだと思います。たかさんのわからないこととの出会いは、いいかえればたかさんの発見の可能性との出会いであると思います。皆さんの学生生活がそのような戸惑いと発見にあふれたものになることを期待しています。

(みかさ ともひろ 工学部助教・建築計画)